

ラテンアメリカ・ ビジネストレンド

ある日本・ペルー経済交流 の功労者の足跡

ルイス・ベガ日本ペルー経済委員会 (CEPEJA) 委員長

設楽 隆裕 (ジェトロ リマ事務所長)

今年 (2023 年) は日本とペルーが外交関係を結んでから 150 年目を迎える記念の年だ。また 2019 年に対面形式で最後に開催された第 13 回日本ペルー経済委員会 (於: ペルー) から 3 年ぶりに同委員会が日本で開催される年でもある。その間、コロナウイルスによる世界パンデミックで 2020 年のペルー経済は多分に漏れず大きく後退 (前年比 GDP 成長率 -11.1%)、翌 2021 年には総選挙で急進左派政権 (ペルー自由党 / ペドロ・カスティージョ大統領 [当時]) が誕生し、2022 年末にはカスティージョ大統領が議会によって罷免されるという激動の 3 年を経てきた。それ故に、2007 年から長きにわたりペルー側の委員長を務めてこられたルイス・ベガ氏が今年の協議会に寄せる期待は大きい。今回は少し趣向を変えて、誰もが知りえる両国政治経済情勢や日本ペルー経済委員会の話はさておき、ベガ委員長ご本人の人物像にスポットを当ててみた。

今年で御年 85 歳を迎えたベガ委員長。コロナ禍で一時は杖を使うようになられ、その健康状態が心配されたが、久しぶりに取材で訪れたペルー日本経済委員会 (CEPEJA) の事務所でお会いすると元気に杖無しで歩かれて、いつもの笑顔で出迎えてくれた。

まずは今回の取材の主旨を「誰しもがルイス・ベガ CEPEJA 委員長はご存知だが、人間ルイス・ベガ氏のことには知らない。150 周年の記念の年にぜひとも日本側の皆さんに知ってもらいましょう」とお伝えすると、頭を抱えて苦笑いで「やれやれ」といった様子で招き入れてくれた。しかし、事前にスタッフから伝えていたこともあり、よくよく見ると事務



ルイス・G・ベガ CEPEJA 委員長 (執筆者提供)

所の机の上には、所狭しとご本人にまつわる数々の資料が年代順に並べられていた。さすがはベガ氏だ。

小職がベガ氏とこうして話す機会は 2018 年の着任後いく度かあり、断片的には幼少期から社会人になられるまでのご経歴は存じ上げていた。今回はそのパズルを改めて完成させる機会となった。

父から学んだプリンシプルーペルーでの少年時代

ルイス・G・ベガ氏は、1938 年 6 月 13 日にペルーの首都リマ市で生まれる。その昔ベガ家は、スペインの北東部にあるバスク地方からペルーに移住したのだが、ベガ氏は「私はスペイン系ではなくバスク系移民だぞ」とくぎを刺す。誇り高きバスク人としての一面だ。その後、今年で開校 75 周年を迎えるリマ市の名門マルカム・カレッジ校 (markham college) に初代入学生の一入として入学するが、上級生からの 1 年生に対する虐めが酷かったという。ただし、それに対して少年ベガは一切怯むことなく、毎日喧嘩しては制服の衿しか残らない状態で帰宅していたという。ただし、喧嘩する際もベガ少年は「相手が自分より大きいこと」「身体的なハンディキャップを持っていないこと」という条件に当てはまる相手のみと戦ったという。

取材を通してベガ氏が繰り返し使うキーワードがある。「倫理 (Ética)」と「価値観 (第三者に対する誠実さ、礼儀、責任感、感謝など) (Valores)」だ。この二つを培った背景にはベガ氏が最も尊敬するという父親 (マヌエル・フランシスコ・ベガ・ボガルドゥス氏) の存在がある。その昔、ベガ氏の父は少年時代に英国に留学していたが、16歳の時に祖父が急死したため、急遽帰国。高校生にして一家を支える立場に置かれる。その後、彼は様々なビジネスを起し成功するのだが、ある程度の蓄えができた時に英国で未納となっていた学費を完済するために渡英するが、就学していた学校は既になくなっていて。普通ならここで諦めるものの、ベガ氏の父親は新聞に案内を掲載して同校のオーナーを探し出す。オーナーからは既に閉校したから支払い義務はないと言われるが、「貸しは返すのが筋 (Lo que se debe, se debe pagar)」と言って全額を返済する。この出来事こそが、少年ベガ氏の心に父親への尊敬の念と共に前述の「倫理」と「価値観」を深く刻むことになる。

エンジニアへの夢 - 英国での青年時代

マルカム校を卒業したベガ氏は、その後父親の勧めでスコットランドのエディンバラにある名門フェティス・カレッジ (Fettes College) に13歳で留学する。当時の同校は男子のみの寄宿舎学校で、兵役もあるためベガ氏は空軍学位も有している (余談だが、同校は英国の有名スパイ小説の主人公ジェームズ・ボンドが通ったことでも有名)。ベガ氏の父親に同校を勧めたのは、ベガ氏が今日まで英国の父親と呼ぶ国会議員 (MP) で女王陛下相談役 (QC) であったサー・ノックス・カニングム氏 (Sir Knox Cunningham) だ。ペルー YMCA の会長を務めていたベガ氏の父親が英国 YMCA を訪れた際に英国で最も優秀な学校を尋ねると、たまたま同席していた当時のフェティス・カレッジの学長と旧友であったサー・カニングムが同校を紹介したのがきっかけであった。その時点で既に入学希望者が300人という狭き門であったが、ベガ氏は入試テストに見事合格する。

寄宿舎生活のフェティスの校則は厳しく、在學生は一切親や外部からのお小遣いを受け取ることが許されていなかったという。一方で休暇中は対象外であったため、ベガ氏は休暇の3割だけ休み、残りはカニングム氏経由で得た特別就労許可書で様々な企

業で働いた。特に英国ゼネラルモーターズ (GM) では、車の内装作業の生産性を高めるための改善を行った功績が認められ、車1台をその対価として同社から贈呈されたというから驚きだ。

フェティスを卒業したベガ氏は、父親から将来の夢を聞かれ、エンジニアになりたいと願い出る。その際に父親が出した条件が、英国で上位5校の大学に入学できれば学費を出すと言われ、これまた見事名門のラフバラ大学 (Loughborough University) に合格し、5年間在学する。また、同大でベガ氏は初めて日本文化に触れることになる。何と同大の柔道部に入部しキャプテンを務めたのだ。それだけでなく、1961年の当時の強豪大学のロチェスター工科大学とロンドン大学を下してラフバラ大学柔道部に初の大学対抗柔道大会の優勝をもたらす。その後、本国ペルーでも全国優勝も経験し、腰骨を骨折して引退するまで現役を続けた。今でも柔道が最も好きなスポーツであるという。

教育者とビジネスマンの二足のわらじ

- 今日までの足跡

ラフバラ大学を卒業した後に、ベガ氏はペルーに帰国する。当初は飛行機で渡英したベガ氏だが、将来二度と経験することがないであろうということで帰国には船旅を選んだ。その旅路の船舶であった英国客船「レイナ・デル・マル (Reina del Mar : 海の女王)」の甲板で、当時ペルー国立工科大学 (Universidad Nacional de Ingeniería: UNI) で教鞭を執っていたマーランド氏と出会う。ベガ氏は、その出会いこそが自身の運命を変えることになろうとも知らず、マーランド氏から「ところで君の専攻は何だね？」と聞かれ、自身がエンジニアで、かつ大学での卒論テーマが「生産設備の設計と応用」であると答えた。その途端、マーランド氏は頭を抱えて驚愕したという。それもそのはずで、マーランド氏がペルーで3年間探していた人材が目の前にいたからだ。同氏にUNIでの講義を依頼されたベガ氏はその後10年間、仕事の傍ら同大学で週1回の講義を受け持つことになる。受講学生が25歳、ベガ氏が27歳の時の話だ。

週1回とはいえ、当時のベガ氏はリマから南へ約200キロ離れたイカ州チンチャ県在住であったため、大学での講義には片道3時間の道のりを運転して通ったという。10年間一度たりとも遅れることな

く講義開始の午前8時の15分前には到着していたベガ氏は、学生たちにも5分前には教室に入ることを求めた。遅刻者は一切入室させないという厳しさだ。一方、学生たちが講義に集中できるようにメモ取りの時間を省くため講義内容の資料は全て事前に配布した。また、最終試験の際には「鉛筆」と「計算尺」のみを持たせ、カンニング防止のため席順は当日発表した。更に全体が見渡せるように自身は教壇の机の上に椅子を置き、そこに座るといふ念入りぶりだったという。自らが英国で学んだことをペルーの学生に伝えることに熱意を注いだ結果、10年間で指導した約600人の学生の半分以上（ベガ氏曰く65%）がその後の人生で優秀な成功を収めているらしい。

一方、大学での講義の時間以外は、父親から家業である自動車部品会社（IPASA社：Industria Peruana del Acero）を手伝うように言われるが、まずは業界のノウハウを学ぶために父親の誘いを断り英国でも勤務経験のあったペルー・ゼネラルモーターズに就職する。そこでも専攻を活かして、同社の研修所で代理店のサービスマネージャーを相手に研修マニュアルの作成に携わる。数年後、父から珍しくランチに誘われたベガ氏は、その場で「お前が必要だ（Te necesito）」と言われ、父のもう一つのビジネスであったチャンカイ市にある魚粉工場（Pesquera América社）に転職。同社でも専門知識を活かして、入社から半年で生産量を倍増させる。その後、南米初のトラック用の重ね板バネ製造メーカーのIPASA社に迎え入れられ、ここでもまた作業方法や生産ラインの再設計などを行い、入社半年で生産量の8割増産に成功させる。また、取扱品目の多角化にも取り組み「点火プラグ」「オルタネーター（交流発電機）」「電圧レギュレーター」「ホイール」などにも参入。その過程でIPASA社は三菱グループや日立製作所など日系企業との関係も開始する。前者からは、奇しくも米国による第一次鉄鋼産業保護政策下でホイール用の鉄鋼を輸入し対米輸出を行った。また後者からは点火プラグを輸入したという。

その他、ペルーにおけるエンジニアおよび教育者としての功績は大きく、主な公職歴にはペルー工業協会（SNI）会長 [91～93年]、ペルー輸出事業者協会（ADEX）会長 [04～07年]、ペルー国立工科大学（UNI）名誉教授 [07年] などがある。また、2017年には日ペルー経済関係を促進したとして日本政府から外務大臣賞、2018年には日ペルー経済関係

強化および友好親善に寄与したとして旭日中綬章を授かる。

11月の来日が何回目になるのかご本人も覚えていないというが、3年ぶりの日本ペルー経済委員会を成功させたいというベガ委員長の熱意と、人懐っこいお人柄の下に多くのペルー関係者が集い準備を進めている。会の成功を心から祈念する。

（しだら たかひろ 日本貿易振興機構[ジェトロ]リマ事務所所長）

